広島民報

2019年 8月11日 第2539号
月3回刊 日曜日発行

発行所　広島民報社
〒730-0013 広島市中区八丁堀8-11／電話(082)228-4046
(昭和41年2月19日第三種郵便物認可)
1ヵ月 240円(送料123円)／1部 80円
郵便振替 01330-2-34778

© 広島民報社　2019年

原水禁世界大会・広島
核禁条約の発効を

原水爆禁止2019年世界大会は広島市中区で、3日から5日まで国際会議、5日に市民と海外代表の交流集会、6日にヒロシマデー集会がそれぞれ開催され、国民平和大行進は4日に平和記念公園に集結しました。

国際会議では、核兵器禁止条約の発効へ関係各国が誠実に交渉するよう求める「宣言」を採択。ヒロシマデー集会では、決議「広島からのよびかけ」(本紙次号に全文を掲載予定)を採択しました。

「宣言」を採択した国際会議＝3日、広島市中区

平和記念公園に集結した国民平和大行進＝4日、広島市中区

被爆74年の原爆の日
碑前祭・追悼式など多彩に

広島市では被爆74周年の「原爆の日」の6日を中心に、被爆者の願いを語り継ぎ、核兵器廃絶を求める行事が各地で多彩に開催されました。

5日には、高校生平和ゼミナールの「原爆瓦」が組み込まれた「原爆犠牲ヒロシマの碑」前で碑前祭が、韓国人原爆犠牲者慰霊祭も碑前で、それぞれ営まれました。

6日には、広島市が平和記念公園で平和式典を挙行。また、財団法人広島県動員学徒等犠牲者の会の第63回追悼式が「慰霊塔」前で、核兵器なくそう平和マラソン大会が広島城址でありました。

「ヒロシマの碑」前での碑前祭＝5日、広島市中区

韓国人原爆犠牲者慰霊祭＝5日、広島市中区

新婦人広島県本部
『木の葉のように焼かれて』発行し続けて50年余

第53集の発行にあたって会見する森会長(前列中央)ら＝7月25日、広島市役所

新日本婦人の会広島県本部が発行し続けている原爆の被爆体験手記集『木の葉のように焼かれて』が今年の発行で第53集となり、森真理子会長や編集委員らが7月25日、広島市役所で会見しました。

核兵器のない世界を実現しようと、被爆地ヒロシマの新婦人の使命をしっかり果たしている宝物が『木の葉』です。ヒロシマの新婦人として、編集委員を若い世代に引き継いだり、多くの会員が被爆者を紹介してきたことが、粘り強く50年余も発行し続ける力になりました。

第1集の発行は1964年で、大阪・京都で開催された第10回原水爆禁止世界大会に持ち込むと、被爆の実相と原水爆禁止の声を綴った冊子として注目されて完売。当初は1回だけ発行の予定でしたが、冊子を読んだ人たちから感想文とともに「次もぜひ」との声がたくさん寄せられました。第2集、3集…と重ねるうち、平和学習や学校での教材、家庭での読み聞かせなど、全国の平和を願う人々の中で育てられました。

(2面へ続く)

前参院議員
仁比そうへい駆け歩き
いったん国会を離れるが…

大激戦の参議院選挙は、7月22日午前7時40分、比例代表区で共産党最後の議席が確定し、私は残念ながら届きませんでした。大阪選挙区で辰巳コータローさんの議席も失いました。今回は競り勝てませんでしたが、比例5議席まであと17万票余り。最終盤猛然と追い上げた私たちの奮闘は、埼玉で21年ぶりの伊藤岳さん、全国32の1人区のうち沖縄、愛媛、大分を含む10選挙区でつかみ取った野党共闘の大勝利に大きく貢献したと思います。

「安倍内閣のもとでは暮らしも民主主義も本当に危ない」―選挙戦を通じて、国民のみなさんのみなぎる思いをたくさんの要求とともに受けとめてきました。野党共闘は鍛えられいっそう深化しています。その結果、安倍総理が憲法9条を狙って改憲発議を押し通そうとしても必要な3分の2の議席を割り込ませることができたことは、これからの国会の様相を変えるでしょう。消費税増税を強行しようとする安倍政権はいっそう追い詰められることになるでしょう。次は解散総選挙です。

いったん国会から離れることになりますが、「絶対にあきらめない」―それが本当の民主主義の政治をつくる何より一番の道筋です。SNSで新しく広がったつながりも力に、「安倍政治NO！　暮らしに希望を」と全力で訴えた公約実現に向けて、みなさんと力を合わせ、大きな運動で国会を包囲していく先頭に立ってまいります。これからも、つねに現場から、憲法を生かす政治へ。頑張ります！

SNSに仁比さんがアップした写真

地下水

我ハ奇蹟的ニ無傷／ナリシモ、コハ今後生キノビテ／コノ有様ヲツタヘヨト天ノ命／ナランカ。◆これは、あの原民喜が疎開先の広島の生家(幟町)で被爆して避難する途中の翌7日、東照宮(現在の東区)の境内にいた時から持っていた手帳に書き始めたメモの中に残された記述の一つで、あの惨状を目の当たりにするなかで、原が捉えられた思いを表現したものです◆メモはやがて1947年発表の代表作「夏の花」などに結実することになりますが、原爆を題材とする小説「管絃祭」「儀式」などを残した被爆者の竹西寛子は、70年に刊行された晶文社版「夏の花」に、「広島が言わせた言葉の原典としての重みをもつものである」という解説を寄せています◆「コノ有様ヲ」自分らしい仕方で「ツタヘ」ようと格闘した原が46歳で鉄道自死してから今年は68年。高齢となった全ての被爆者の声を、そして小さな声を置き去りにしない社会を実現するためにも、「夏の花」など原の作品は、もっと読まれる必要があるでしょう。(ま)